

## 現地に見る旺盛なブラジルでの農業投資

主任研究員 阮 蔚

### 1 世界トップ企業が集まる「セラード」

世界の穀物価格が新たなステージに移行した2007年以降、「ランドラッシュ」と呼ばれる国際的な農地への投資まで発生したことが象徴するように、長期間低迷していた農業関連の投資は盛んになってきた。その最も盛んな国はブラジルであるが、特に開拓が遅れているブラジルの中部、北部と北東部に広がる、「不毛の大地」と称されるセラード地域は、世界で残された最大の未開拓地でもある。

このセラード地域は、ブラジル国土の25%に当たる約2億haもあり、メキシコ全土と日本国土の5.4倍にも相当する(第1図)。セラードの最大の特徴は、とにかく平坦で農業に適している大地であり、少なくとも7,000万ha(中国総耕地面積の約6割に相当)の土地が耕地に開拓可能とみられる。11年12月にこのセラード地域の北東部にあるバイア州西部の生産と輸出物流の状況を調査してきた。

バイア州西部は日本国土面積の約4分の1に当たる914万haの広さがあるが、ここに投資し

ている企業の名前から投資ブームの様子がうかがえよう。それらは、穀物メジャーのCargillやBunge、ADM、Louis Dreyus、中堅企業で穀物貿易を行うNoble(香港)、Amaggi(ブラジル)、Los Grobos(アルゼンチン)、Ceagro(ブラジル)とMultigrain(三井物産所有)、種子会社のMonsanto、Pioneer、農業機械のJohn Deere(米国)、Case New Holland(米国)など、いずれも世界トップレベルの企業である。中国(重慶)の搾油メーカーも参入しようとしている。

これら企業が殺到してきた背景は、バイア州西部で競争力の高い大規模農業が展開し、今後さらに379.8万haの土地が農地として開拓可能とされ、また輸送インフラも近年急速に整備されつつあることである。

### 2 資本集約的巨農農場

今回、バイア州西部でヒアリングした三つの農場は、それぞれ8.5万haのMizote、11.6万haのXingu、14.8万haのHoritaであるが、いずれも米国の大農場に比べてもケタ違いに大きく、世界トップレベルである(写真)。Horita農場は東京都23区の2倍以上に相当すること

第1図 ブラジル中西部に広がるセラード地域



資料 「ブラジル農業畜産食糧供給省」資料から作成



ブラジルのバイア州西部LEM市郊外にある農場  
(2011.12.4 筆者撮影)

からその広さがうかがえよう。ちなみに、Xingu農場は11年に三井物産に買収され、他の二つは日系ブラジル人によるものである。

これらブラジルの大農場の特徴は、まず、農産物の国際需給動向と国際価格に敏感に反応し、最も収益性の高い農産物を栽培し、また価格下落のリスクを防ぐため先物契約で農産物の相当部分を事前にヘッジしていることである。次に、衛星などを含めた次世代IT(情報通信)技術を活用した最先端の大型農業機械を導入して効率を求める。例えば、自動車用のナビゲーターよりはるかに精密なGPS(全地球測位システム)を搭載した最新の大型トラックやコンバインなどが導入され、これらの機械により収穫の効率が高くなるだけではなく、単収はいくらか、それぞれの場所の土壌成分はどうなっているか等が測定できる。そうすると、単収に合わせて、その土地がどういう成分の肥料を追加すればよいかということが分かり、余分な肥料の投入を避けることもでき、単収増加と生産コストの削減につながる。

さらに、GMOなど効率向上につながる最新品種の導入や、Non till＝不耕起・直まきなど土壌の水分を守り、コスト節約的な最新農法の導入にも積極的であり、また、生産現場の経営はヘッドハンティングしてきた経験者に任せる。

米国もアルゼンチンも穀物生産においては大規模農家が中心となるが、ブラジルと異なるのは新規開拓の農地が少ないために新規参入者が少なく、農場の所有者本人は土地への執着が強く、自ら耕す農家が多い。それに対してブラジルの新規参入者は土地への執着より農業をビジネスとして収益性を追求する企業経営者タイプが多いのである。

### 3 『沈黙の春』——鳥もトンボもミミズもいない大規模農場

しかし、これら世界級の巨大農場を回って

いる時、妙な現象に驚いた。南半球のブラジルの大地では、12月は大豆やトウモロコシの新しい芽が広大な一面に出て、生命が蘇る春のような光景のはずである。しかしなぜか、鳥の鳴き声もなく、トンボも昆虫も飛んでおらず、荒野でよくみかける蚊柱などもなく、土の中にミミズもいない。環境破壊を糾弾した『沈黙の春』(“Silent Spring”, Rachel Louise Carson)という本が描く場面を思い出させるぐらい、とにかく妙に静かで、「きれい」な大地である。

要因はいくつか考えられる。まず、GMO種子を大量に使っていることである。GMO種子はもともと病虫害が発生しにくく、それに専用の農薬などを散布したりしている。また、工場のような連続生産のために、収穫後の作物(葉っぱや茎など)を薬剤ですぐに枯れさせてもいる。こうした手法の結果、病虫害の発生が抑えられているわけだ。虫がいないため、鳥も来ないのは当然だ。生産性を追求した結果、生まれてくる人工的な「不毛の大地」とでも呼ぶべきだろうか。

さらに、土地改良して間もないという要因もあるのかもしれない。セラードは酸性の強い土壌であるため、中和剤となる石灰を大量に入れ、リンなどの肥料を施してから初めて穀物の作付けが可能となる。今回調査した農場は、開拓して間もないため、ミミズがまだ入ってきていないというように考えたい。数年後、再訪した際に、土の中に多数のミミズが生息していることを願っている。ブラジルでの農業投資の活発化は農産物の供給拡大につながるため、人口がこれからも増える世界の食糧問題の解決に貢献するものであるが、農地開拓や生産性の追求は環境との調和等課題を伴うものであることを忘れてはならないだろう。

(ルアン ウエイ)